

第 86 回 東京都港区の松岡清次郎立像と渋谷区恵比寿の銅像

筆者：林 久治（記載：2019年4月4日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は [日本の銅像探偵団](#)（1）のサイトの銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」という意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいたので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はそのような「スクープ銅像」の候補となりそうな多数の銅像をネットで見つけている。

今年の2月21日から3月4日まで、私は大阪千里山に滞在して、孫達と遊んで来た。その間、近畿地方で銅像探索を行って来た。[81回の記事/f](#)では、宝塚市の馬上太子像と神戸市東灘区の嘉納治五郎像の探索記を記載した。[82回の記事/f](#)では、京都市山科区の蓮如像の探索記を記載した。[83回の記事/f](#)では、大阪市の銅像探索記を記載した。

東京に帰京してから、私は3月13日に東京谷中で岡倉天心像を探索し、その探索記を[84回の記事/f](#)に書いた。3月19日に、私は港区で芝パークホテルの犬丸像と松岡美術館の松岡像を探索し、その探索記を[前回の記事/f](#)に書いた。松岡美術館では中庭に立像があったが、中庭に立ち入ることが出来なかった。受付嬢に聞くと、「桜の時期に公開する」との返事であったが、具体的な公開日は教えてくれなかった。

受付嬢が「公開日はツイッターで知らせる」と言うので、松岡美術館のツイッターに注目していた。[2\)のサイト/2](#)に「**本日から中庭を開放しております。（雨天時は中止いたします。）2019年3月26日**」との記事があったので、私は3月29日に松岡美術館を再訪した。その後、渋谷区恵比寿駅周辺の銅像を探索した。今回は、それらの探索記を記載する。なお、本稿においては、資料の記述を**緑文字**で、私（林）の意見や説明を**青文字**で記載する。

（2）芝公園

[前回の記事/f](#)で書いたように、私は「東京都シルバーパス」を利用している。港区で都営大江戸線から都営三田線に乗り換えるのは不便である。今回、私は大江戸線の赤羽橋駅で降りて、三田線の芝公園駅に乗車するルートを試してみた。次ページの図1上に、芝公園周辺の地図を示す。

図1上の**+**の地点に、妙定院という寺院があった。当院の災除地蔵尊が綺麗であったので、その写真を図1下に示す。説明板によれば「**戦災前、当院には木造丈六の地蔵尊があり、霊験あらたかであった。戦後、石像として再建された。**」そうである。



図1. 上：芝公園周辺の地図 本図は、[3\) のサイト/](#)より借用。+の地点が妙定院。下：妙定院の災除地藏尊

大江戸線の赤羽橋駅から三田線の芝公園駅への乗換は、徒歩約10分で便利であった。私は三田線の白金台駅で降りて、松岡美術館に行った。その道順は、[前回の記事/f](#)で説明したので、今回は省略する。

(3) 松岡美術館の松岡清次郎立像

松岡美術館の入場料は、一般800円/65歳以上・障害者700円/中高大生500円(20名以上の団体は各100円引。また、HPにある割引券を利用すると100円引。)と、割合高い。ただし、前回に「リターン割引券(入場料は半額)」を貰ったので、今回は350円で済んだ。お蔭で、再訪の負担感が無かった。(本文は、4ページに続く。)



図2. 松岡美術館の松岡清次郎立像

前は、1階ロビーから中庭に行く扉が施錠されていた。今回は、開錠であったので、私は一目散に中庭に入った。中庭には、色々な木々が植わっていて、桜は1本しかなく、桜満開の気分にはなれなかった。中庭の奥には、太鼓腹のオッサンが両手をポケットに入れて傲然と立っていた。台座のプレートには「松岡清次郎之像」と書いてあった。予想通り、中庭の立像の主は、松岡清次郎氏であった。台座には

他に銘文はなく、立像周辺には説明書が無かった。従って、本像の製作時期や製作者は不明である。

私は前回の訪問で松岡美術館の展示品を既に見ているので、今回は中庭の立像を撮影しただけで、次の探索地の恵比寿駅に向かった。

(4) 恵比寿・カルピスビルの三島海雲像



図3. 恵比寿駅周辺の地図 本図は、[4\) のサイト/1](#)より借用。

①：恵比寿駅西口、②：カルピス恵比寿ビル、③：東京声優アカデミー。

[日本の銅像探偵団](#)のサイトには「指名手配銅像」という欄があり、本サイトの団長が銅像写真の投稿を要請している。しかし、偏屈老人の私は、出来る限り指名漏れの銅像を探している。東京都の指名手配の中に、三島海雲像（渋谷区恵比寿南カルピス本社）がある。たまには団長に協力しようと思い、今回は本像を探索することとした。また、[5\) のサイト/8](#)により、カルピス本社の近くにある「東京声優アカデミー」に、市原敏胸像と中野壽美胸像があることも知った。

そこで、私は松岡美術館から恵比寿駅に行って、これら3像を探索した。恵比寿駅周辺の地図を図3に示す。最近、駅の多くは商業ビルと一体となって複雑になっている。恵比寿駅もその例に漏れず、大変複雑になっていたのも、私は駅の出口がよく分からなかった。図3によれば、カルピス本社（図3の②）に行くには、西口（図3の①）から出れば簡単に行ける。しかし、私は「スカイウオーク」に乗ってしまったので、「恵比寿南一公園前」まで行ってしまった。

私はあちこち迷って、やっと「アサヒグループ・カルピス恵比寿ビル」の入口に到着した。その写真を次ページの図4に示す。立派なビルの前には広い前庭があった。敷地の入口には何も無かったので、私はビルの玄関に直接行った。玄関を入ると、広いロビーがあった。私はロビーを一瞥したが、銅像はなかった。そこで、私は一抹の不安感を抱きながら、受付嬢に尋ねた。

私「三島さんの銅像はどこにありますか？」

受付嬢「サア。守衛さんに聞いて下さい。」

早速、守衛のオジサンがやって来て、「創業者の銅像は外にあります」と教えてくれた。彼は、読売グループの守衛のような高圧的態度ではなく、親切な気持ちが滲み出ている。私は「さすがに、カルピスさんは偉い」と思い、カルピスがますます好きになった。広い前庭をじっくりと見渡してみると、一面に胸像があったので、私は安堵した。



図4. 上：アサヒグループ・カルピス恵比寿ビル、下：三島海雲翁寿像。



図5.
左：三島海雲翁寿像、
右：台座の銘板。

胸像の傍には顕彰碑が建っている。しかし、その文字はかなり風化しているので読み難い。その銘文を何とか判読して、以下に記載する。

創業者 三島海雲

1878年（明治11年）7月生 1974年（昭和49年）12月死亡 享年97歳

カルピス社の創業者三島海雲は、1902年（明治35）青雲の志を胸に無限の可能性と夢を求めて中国大陸に渡りました。1908年、内モンゴルを訪れた海雲は、遊牧民が常飲している酸乳（発酵乳）を毎日口にしたところ、数日後、弱っていたからだの調子が目を見張るほど良くなっていくのに驚かされました。

1915年（大正4）に帰国した海雲は、国利民福（国家の利益・国民の幸福）を願い、1917年、恵比寿南この地に事業を興し、1919年（大正8）7月7日（七夕）にモンゴルで出会った“酸乳”をヒントに、世界初の乳酸菌飲料「カルピス」を発売しました。以来、「カルピス」は、多くの人に愛されて、幾世代にもわたって飲み継がれてきております。

平成16年（2004年）12月12日 当地に設置す カルピス株式会社

ウィキペディアによれば、カルピス株式会社の沿革は次の通りである。

1916年4月：三島海雲は前身となる醍醐味合資会社を設立。

1917年：三島海雲はラクトー株式会社設立。

1919年7月7日：三島海雲はカルピス発売。

1923年：三島海雲はカルピス製造株式会社に商号変更。

2007年10月1日：味の素株式会社の完全子会社になる。

2012年10月：味の素が保有していた全株式をアサヒ飲料等を傘下に持つアサヒグループホールディングスに譲渡され、同社の完全子会社となった。

2016年1月1日 -：乳製品の販売を行っていた（初代）カルピス子会社のカルピスフーズサービスが（初代）カルピスから国内飲料製造事業と乳購買を含む乳製品事業を承継して

(2代目) カルピス株式会社に商号変更し、アサヒ飲料の子会社に移行。カルピス本社は東京都墨田区吾妻橋のアサヒビール本社ビルに移転。

なお、[6\) のサイト/1](#)によれば、「アサヒグループ・カルピス恵比寿ビル」の全館（1階から10階まで）は、「アサヒカルピスウェルネス株式会社」の本社が入居している。この会社はアサヒグループの子会社で、カルピス関連事業の一部を担当しているようだ。

ちなみに、私の母は1919年6月生まれで、今生きていれば100歳になる。カルピスと同じ年である。私はカルピスが大好きである。暑い時も寒い時も、冷やしても温めても、清々しい味がする。このように長い間、全国民から愛飲された飲料は他に類を見ない。ビールや清酒も良いが、子供や女性には好まれない場合も多い。三島翁のカルピス開発のエピソードは沢山書かれているが、その一部を以下に紹介しよう。[7\) のサイト/1](#)は次のように書いている。

一昔前は『甘くてすっぱい初恋の味、カルピス』。そして現在は『身体にピース、カルピス』・・・に、宣伝文句は変わりましたが、この『カルピス』ってお坊さんが発明した飲み物って知ってましたか？そのお坊さんの名は『三島海雲（みしま かいうん）』翁と言い、大阪は箕面市の浄土真宗のお寺（『教学寺』）に生まれました。

彼の人生は波乱の連続で、〔お坊さん〕の資格は取ったもののお寺を継がず、学校の〔教師〕になり、さらに機会を得て、中国に渡り〔商人〕になりました。時は、日露戦争に入ったばかりで、彼は商売の為、モンゴルへ軍馬の調達に出ます。その長旅の疲れで、旅の途中、倒れてしまった時、モンゴル人から〔『ジョウヒ』という名の発酵乳酸飲料〕を飲ませてもらい元気を回復します。

『これは、凄い飲み物だ！』と感動した三島海雲は、日本に帰り、お寺の本堂地下で製品研究を重ね、ついに『カルピス』を完成させるのです。カルピスの『カル』は「カルシウム」の『カル』。カルピスの『ピス』は、仏教語『醍醐（だいご）＝最高の味の意味する「サルピスマンダ」』から「ピス」を取り、名づけられました。

そして『カルピス』は大ヒット。・・・東京進出を図りますが、その時『関東大震災』が首都を襲います。その時、三島海雲がとった行動が、工場のすべてのカルピスに氷を入れて飲めるようにして、無料で被災者に配ることでした。それによって彼の会社は、すっからかんになりますが、今度は助けてもらった市民が、彼をそしてカルピスを支え、今日の発展へと向かわせます。

最後まで『仏教の奉仕精神』を失わなかった『三島海雲』の生涯を今、紙芝居にして作っています。あまりにスケールが大きい為に、現地取材（中国・モンゴル）に行けず、今、資料だけをたよりに絵を描いています。ありがたいことに、現『教学寺』の住職は、僕の友人である為、『海雲』翁のいろんな裏話を聞かせてもらいながら、書き進めています。今年中には完成予定の紙芝居『カルピスを作った僧侶～三島海雲』。・・・今、必死に（時間を見つけ）製作中です。お楽しみに

上記のように、三島翁は箕面市の水稻山教学寺という貧乏寺に生まれた。私は「ここにも銅像があるかもしれない」と思い調べてみた。しかし、残念ながら銅像はなく、その代わり立派な石碑があった。その写真を[8\) のサイト/1](#)より借用して、次ページの図6に示す。[9\) のサイト/4](#)には、碑文が記載されているので、それを以下に転載する。

三島海雲翁頌徳碑 文学博士天野貞祐 撰文

翁は明治11年7月2日ここ大阪府豊能郡萱野村に誕生 父は真宗教学寺住職三島法城師 翁の没我的精神は佛（仏）門に由来する 翁は光瑞法主の命により僧籍を離れず現に西本願寺參與（与）である 母は名門中道家の出 雪枝女史 希有の賢女であった

翁は西本願寺文字寮卒業後 機会を捉えて中国蒙古に渡り大和土倉家の後援を得て諸事業に没頭すること十有余年 帰国ののち蒙古人の生活から着想 酸乳よりカルピスを発明 刻苦六十年 会社は目覚しい発展を成した 翁はこの隆昌を社会に還元せんと考え 私財全部を投じて学術研究奨励の機関を創設した

翁は性恬淡（てんたん）にして所有欲 少なく 諸方面人士に敬愛され 九十三歳にしてなお未来への夢に生きている 頌徳（しょうとく）碑を仰ぎ見る諸君 この偉人を讃嘆（さんだん）すると共に 翁の心を心とせられんことを

昭和 46（1971）年 12 月



図 6. 三島海雲翁頌徳碑

所在：水稲山教学寺

宗派：浄土真宗本願寺派（お西）

住所：大阪府箕面市稲 2-6-15

寺の建立：天文元（1532）年 4 月

本写真は [8）のサイト/1](#) より借用。

（5）恵比寿・東京声優アカデミーの市原敏像と中野壽美像

私は、[5）のサイト/8](#)より、カルピスビルの近くにある「東京声優アカデミー」に、市原敏胸像と中野壽美胸像があることも知っていた。そこで、カルピスビル（図 3 の②）から東京声優アカデミー（図 3 の③）に行った。この界限は、恵比寿の繁華街で、大小のビルが乱立していた。次ページの図 7 上には、東京声優アカデミーのビルと、その階段下に設置された 2 体の胸像を示す。図 7 下には、市原敏先生と中野壽美先生の胸像、及びそれらのネームプレートを示す。10 ページの図 8 より、両像の概要は次の通りであることが分かった。

設置場所：東京都渋谷区恵比寿南 3-1-5 東京声優アカデミー

設置時期：昭和 35 年（1960 年）9 月 24 日

銅像作家：盛岡勇夫（立体写真像株式会社）

設置経緯：市原敏（1894. 2. 17-？）、中野壽美（1901. 10. 3-？）。創立 30 周年を記念して、東京高等技芸学校の学友会が寄贈。

（本文は、10 ページに続く。）



図7. 上：東京声優アカデミーのビルと、その階段下に設置された2体の胸像、
下：市原敏先生と中野壽美先生の胸像、及びそれらのネームプレート。



図8. 上：市原敏先生像と背面の刻文、下：中野壽美先生像と背面の刻文。

市原像の台座の側面には、1枚のプレートが貼られており、それには次のように記載されている。**昭和36年2月27日 従六位勲六等二叙サレ 瑞宝章を賜ハル**
 私には銅像作家の盛岡勇夫（立体写真像株式会社）は初耳であるので、次ページに説明する。両像には、上記以外の情報がないので、市原・中野両先生の経歴や没年は不明である。

私は先ず、東京声優アカデミーを調べて見た。ウィキペディアによれば、本校の概要は次の通りである。

1930年：東京高等技芸学院設立

1955年：直系校180校余に達し、財団法人から学校法人へ

1964年：校名を「東京服飾アカデミー」に改称

1976年：専修学校法の施行により、専門学校に昇格

1980年：創立50周年。東京プリンスホテルにて祝賀式を開く

1990年：校名を「東京ファッションアカデミー」に改称、モデル専攻科新設開講

1997年：校名を「専門学校 東京メディアアカデミー」に改称、声優・ボーカル科を新設開講

2005年：創立75周年。

2008年：声優の育成に特化した単科の専門学校として声優・ボーカル科を声優養成科と改称。

2012年：校名を「専門学校 東京声優アカデミー」に改称

本校に関する情報はこれ以上にはないので、本校の設立者や市原・中野両先生の業績は不明である。

次に、銅像作家の盛岡勇夫（立体写真像株式会社）について調べて見た。立体写真像株式会社の会社案内（[10](#)）の[サイト/1](#)）には、次の様に記載されている。

1927年8月27日、東京朝日新聞、讀賣新聞の各紙が一つの発明を大きく取り上げました。この発明は当時、大変大きな話題となったのです。まずはこの写真をご覧ください。これが『立体写真像』です。

発明者の盛岡勇夫は1893年(明治26年)広島県に生まれ、中学校時代から写真の持つ迫真性の素晴らしさに惹かれ、これをそのまま「立体化」する方法を考え始めました。大学卒業後、一旦は雑誌「新小説」の編集者を務めましたが、芥川龍之介氏・菊池寛氏らとの出会いの中、その文豪達の面貌に深く感銘を受けたのをきっかけに、あらためて人間における「顔」というものの持つ意味に思い至り興味を持ったといえます。

その後、1920年から本格的に『立体写真像』の研究に取り掛かり、3年後の大正12年遂にその完成をみました。しかし、同年の関東大震災により全ての資料を焼失し再制作を余儀なくされ、再び発表するまでにはさらに4年の歳月をかぞえる事になったのです。発表後は、早速高松宮様からお問い合わせを頂き、当社として最初の銅像を制作することになり、同時に現在の前身として(株)資生堂立体写真像部がスタートしました。

1937年には、パリ博覧会において〈立体写真像制作方法〉を出品して金賞を受賞し、世界的にその優れた技術と芸術性の高さが認められました。

しかし当時の社会情勢の変化は、例外なく当社にも降りかかり「銅合金販売禁止令」に伴うダメージは、制作過程の方向転換を余儀なくされそれは終戦後しばらくまで続くこととなりました。それでも戦時中はご自身の形見として、立体写真像を残されたいという方が多かったといえます。

その後 現在に至るまで、各界著名人をはじめ多くの方々のご記念やお祝いにとご自身の像を残されています。同時に各国大統領やアポロ宇宙飛行士など、海外からの方々も制作してきました。[作品集](#)の中でも紹介しています。

顔は人生そのものを表わしている、最高の芸術品です。そのかけがえのない風姿を、ありのままに再現し、永遠に残しておくことができたならどんなに素晴らしいことでしょうか。『立体写真像』は、これからも世界でただ一つの肖像彫刻を提供し続けてゆきます。

図9を見ると、「立体写真像」はなかなかの出来栄である。しかし、銅像の作成には、実在の人物を7台のカメラで撮影して分析する必要があるそうである。それなら、亡くなった方の銅像を残存の写真のみで作成はできないようである。

(6) 恵比寿駅西口のゑびす像

東京声優アカデミーでの銅像撮影を終えて、私は「今日は上手くいった」とほくそえみながら、恵比寿駅西口(図3の①)に帰ってきた。そこで、思い掛けずゑびす像を発見した。本像と台座の銘文を図9に示す。



図9. 左：恵比寿駅西口のゑびす像、右：台座の銘文。

ゑびす像の概要は次の通りである。

設置場所：東京都渋谷区 JR 恵比寿駅西口

設置時期：昭和50年(1975年)11月16日

銅像作家：木下繁(1908-1988)

設置経緯：東京恵比寿ライオンズクラブが創立十周年を記念して寄贈

図9左の「ゑびす像」の筆は三木武夫である。三木(1907.3.17-1988.11.14)は徳島県出身の政治家で、第66代内閣総理大臣(在任：1974.12.9-1976.12.24)であった。三木が本像の名前を書いた経緯を推測すると、①本像の建立当時の首相であ

ったこと、②三木の自宅（渋谷区南平台町 18-20）が近かったことなどが考えられる。三木の写真を図 10 に示す。



図 10. 三木武夫の写真

本写真は、ウィキペディアより借用。

ウィキペディアによれば、三木は生来、不器用で悪筆であったが、結婚直後から妻睦子の母である森いぬの所に毎週火曜日通わされ、習字の稽古をさせられたそうである。稽古の結果、三木はそれなりの字を書けるようになり、揮毫なども行えるようになった。なお、睦子の父・森轟昶（もり のぶてる）は森コンツェルンの創設者で、「財界新人三羽鳥」の一人であったが、現在の「森ビル」とは無関係である。

最後に、[11\) のサイト/1](#)より、銅像作家の木下繁の略歴を以下に記載する。

日本芸術院会員の彫刻家木下繁（きのした しげる：1908. 4. 25-1988. 8. 4）は、和歌山県布田郡に生まれる。1928年東京美術学校彫刻科に入学し建畠大夢に師事し、のち清水多嘉示に師事する。在学中の1930年第11回帝展に「女の顔」で初入選。1933年東美校を卒業し研究科に進学、1935年に研究科を修了する。1939年第3回新文展に「れいめい」を出品して特選、1947年第3回日展出品作「裸婦」、1951年第7回日展出品作「裸婦」でも特選を受賞し、以後たびたび日展審査員をつとめる。1969年第1回改組日展に「裸婦」を出品して文部大臣賞、1973年第5回日展に「裸婦」を出品して1973年度日本芸術院賞を受賞し、1977年日本芸術院会員となる。塑像を得意とし、裸婦を好んで制作する。1964年より1971年まで白色セメント野外彫刻展に出品する。1972年より武蔵野美術大学教授をつとめ、1981年同名誉教授となった。また、1978年より日展常務理事、日本彫刻会常務理事を務めた。1979年勲三等瑞宝章受章。

参考資料

- 1) のサイト：<http://www.geocities.jp/douzouz/>
- 2) のサイト：<https://twitter.com/i/web/status/1110717991346266112>
- 3) のサイト：<https://www.mapion.co.jp/phonebook/M06005/13103/21330122499/>
- 4) のサイト：<http://bb-building.net/tokyo/deta/981.html>
- 5) のサイト：<https://blogs.yahoo.co.jp/takay36/MYBLOG/yblog.html?m=lc&p=8>
- 6) のサイト：
http://blog.livedoor.jp/amenimomakezu_/archives/1065260979.html
- 7) のサイト：<http://o-demae.net/blog/archives/785.html>

- 8) のサイト : https://shrinestour.blogspot.com/2015/03/blog-post_658.html#!/2015/03/blog-post_658.html
- 9) のサイト : <http://blog.canpan.info/miya38ts/archive/554>
- 10) のサイト : <http://www.rittai.co.jp/annai.html>
- 11) のサイト : <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9919.html>
- 12) のサイト :
- 13) のサイト :
- 14) のサイト :